

土沼雅子先生のご退職にあたって

人間科学部臨床心理学科長 高尾浩幸

2015年3月をもって、人間科学部臨床心理学科の土沼雅子教授が定年により退任されることになった。1970年に当時の立正女子大学に赴任されて以来、文教大学で45年間の長きにわたり教鞭をとられた。大学は1976年に文教大学に名称変更となり、人間科学部が設置されたのに伴って、先生は人間科学部に移られ、1998年に臨床心理学科が開設されると当初からその中心的メンバーとなられた。その間、一貫して臨床心理学、人間性心理学を中心に、エンカウンター・グループ、芸術療法の幅広い領域で研鑽を積み、熱意を持ってその成果を学生に伝えられた。

人間科学部への入職順でいえば、同じ専門の人間性心理学領域として土沼先生の次に岡村達也先生がおられたので、当然、土沼先生のすばらしい業績のご紹介は、岡村先生が担われるものと思っていた。ところが、心理学科新設にともない岡村先生は心理学科所属となられたことから、立場柄学科長を務める私にこの役が回ってきた。しかし私はなにぶん入職時期が土沼先生に比較すれば全く新しく、また力不足のため、これまでのご活躍の全容をとらえることができない。そこで以下では、私が先生から薫陶を受けた10年余りを振り返って、思うところを記させていただきたい。

臨床心理学科が発足してから、ほとんどの教員の研究室は8号館に集中していた。当時の8号館2階には臨床心理学科の学科準備室があり、専門図書、専門雑誌の書架と大きめの机が置いてあった。そうした場所に加えて、後に述べる土沼先生のお人柄、熱心な教育のたまものとして、準備室職員には土沼研究室の卒業生が多かった。そのため、時にはお茶と茶菓子を囲み、若い準備室職員を交えて教員の交流の場ともなっていた。教員同士、教員と職員のちょっとしたコミュニケーションの場が気軽に持てる構造となっていたわけで、いまの機能面に優れる12号館とはちがう良さがあったように思う。

教育面において、土沼先生がご担当の授業「人間性心理学」「グループ・アプローチ」「芸術療法」は、受講生にたいへん人気があり、3年次からの土沼ゼミ学生の数は先生が退職されるまでずっと学部学科のトップレベルであった。その人気の背景には、ご講義の質の高さに加えて、先生が学生一人一人と向き合い、よく話しをされる個別的な温かさ、さらにはグループ活動を通して人間的成長を目指そうとする前向きな姿勢にあったと考えられる。

学生のことが話題になると、その学生のことを詳しくご存知なのに何度も驚かされた。通り一遍のつき合いに留まらず、学生と親身に交わり、その関係を通して共に成長していこうとする先生の教育姿勢、さらには生きる姿勢の表れかと印象に強く残っている。

土沼先生の姿勢が学生に共感を得ていたことは、「合宿の土沼」と呼ばれるほどゼミ合宿に絶大な人気があったことにも伺える。毎年、夏の土沼ゼミ合宿では、必ずしも必須ではないにもかかわらず、自

発的なエンカウンター・グループが展開され、学生たちはそれまでには経験したことのない人間関係や自己表現の方法、そして自己洞察を得る。土沼先生が「そこに居る」ことで、学生たちの内側に、間に、表現に、「一歩進んでみよう」という促しが生じてくるわけで、正に「人の持つ諸能力を引き出すこと」というeducationの語源的意味が体験されている。合宿を経験することで、学生たちの仲間との交友や積極的姿勢が見違えるほど変化するのに驚かされる。このようなゼミは、土沼先生の熱意、学識、世界観のすべてが投入された、文教大学で最高レベルの実践であると断言できる。

土沼先生は、学部と並行して大学院でも多くの講義・実習を担当され、多数の院生を研究指導された。2010年4月から定年退職に至るまで人間科学研究科臨床心理学専攻の専攻長を務められ、臨床心理士を目指す院生に対して、臨床心理学専攻教育の責任を担われた。土沼先生が専攻長になられてから、修了生の臨床心理士試験合格率がほぼ100%に達するという現実的に大きな成果をあげている（全国平均は60%程度）。専攻長としての組織運営はもとより、教育カリキュラム構築に意を大きく傾けられた結果である。先生が担当された「臨床心理実習」の授業においては、附属の臨床相談研究所でのケースに対してグループ・スーパービジョン、さらには院生一人一人の担当ケースへの個人スーパービジョンに多くの熱意を傾けられた。こうした手のかかる院生への個別指導によって、院生たちは臨床能力を高め、資格試験に合格している。

土沼先生の40年を超える研究活動の成果は膨大なものだが、本紀要に掲載されている業績一覧によって、私たちは先生の研究成果の一端を垣間見ることができる。学会活動は、日本心理臨床学会、日本人間性心理学会、日本トランスパーソナル/精神医学会、日本仏教心理学会などを中心に精力的に取り組まれ、いくつもの学会の理事を歴任されている。社会活動としては、日本・精神技術研究所公認トレーナー、埼玉県越谷市の職員と家族の精神衛生相談、獨協大学地域と子どもリーガルサービスセンター相談員など、多数の要職を引き受けられた。また、財務省のセクハラ相談員研修、法務省の人権研修、東京高等裁判所・家庭裁判所のグループワーク技法研修、東京都・埼玉県看護協会など各種団体のアサーション研修等、社会・地域貢献の観点から、お忙しい中を積極的にかかわってこられた。

土沼先生は、この45年間、教育、研究、校務、社会貢献のすべてにわたって、最高水準のお仕事をされてきた。学部学科の卒業生はもとより、大学院修了生からもとても慕われる教員として私たちに模範をいくつも示された。大学の環境は変化の波に見舞われているが、学生・院生とかかわりながらの教育を体現された先生のお姿を記憶に留めつつ、これからの臨床心理学教育に活かしていきたいと誓いを新たにす。立場は変わるかもしれないが、これからもご指導をよろしく願います。